

ふじのくに地球環境史ミュージアムでは、展示や教育プログラムの実施だけでなく、高い専門知識を有する研究員による、世界レベルの調査研究活動を行います。このコーナーでは、インタビューを通じて研究員の仕事や、その素顔を紹介していきます。



准教授

きしもと とし お
岸本 年郎

1971年大阪市生まれ。東京農業大学大学院博士後期課程修了後、自然環境研究センターで野生生物保全に関する調査・研究を実施。専攻はハネカクシという甲虫の分類学と生物地理学。静岡のどこにどのような昆虫がすんでいるのかを調査し、その由来、歴史に迫りたい。

昆虫に溺れ、多様性を楽しむ。

Q 昨年は、「ミュージアムキャラバン」で県内の多数の小学校を回り、出前講座を行ったそうですが、その感想を聞かせてください。
A.はじめは今の子どもたちがどれだけ、虫に興味を持っているか心配でした。でも実物と一緒に話をするとみんなどんどん夢中になってくるんです。最初は興味のない子どもです。また、最初に虫の嫌いな人はいる?と聞くと多くの子どもが虫を嫌いという。でも、その嫌いな子ども話には食いついてきてくれる。「虫好き」の反対は「虫嫌い」でなくて無関心だと思えます。虫に関心を持ってくれる子どもたちが増えるように活動していきたいです。

Q 岸本さんご自身は、当然、昆虫少年だったのですか?
A.大阪市内の派手な虫がまったくいないところで生まれ育ったので、図鑑を読んで、出会えない虫に憧れる日々でした。今の子どもは自然を知らないと言われますが、私自身がそうでした。幸い、大阪市立自然史博物館が近くにあり、そこで街中にも多くの小さな虫がいることや、植物なども学んだことが私の柱になっています。本格的に昆虫に溺れたのは大学に入ってから。満を持してという感じでした。それが今まで続いています。ミュージアムに来たので、さらに深く究めたいと考えています。

Q 「昆虫に溺れる」とは凄い表現ですね(笑)溺れると言えば、岸本さんは居酒屋にも相当精通していると噂を伺いましたが…
A.酒が大好きなんです!いろんな種類の酒を、様々な肴と合わせて飲むのが楽しい。酒の面白さは多様性にあると思っています。それは虫と同じこと。地域ごとに特有の食材や調理法があって、それにあう酒があります。食文化や酒はその土地の自然に根差してるんですね。それも虫と同じこと。調査や学会で他県に行くと必ず居酒屋探検をします。雰囲気ひかれて入った店が当たりだった時は嬉しい。山の中で昆虫採集をする醍醐味にも似ています(笑)。

プロフィール画像は、岸本准教授のたつての希望で、県内のとある居酒屋での撮影となりました。撮影終了後も、岸本准教授による「静岡県域の生物多様性と食文化の相関性」講義はとめどなく続き、夜は更けていきました…。

——— 次回は、「人類博士」の日下主任研究員です。

アクセス

〒422-8017 静岡県静岡市駿河区大谷5762(旧静岡南高校跡地)

🚗 自家用車でお越しの場合(ナビでお越しの際は、住所で検索してください)

- ・ 東名高速道路静岡ICから15分
- ・ JR静岡駅から20分[国道150号バイパスから「大谷放水路東」を左(右)折し、消防署前交差点を右折してください]
- ・ 駐車場 無料(200台)

🚗 公共交通機関でお越しの場合

- ・ 静岡駅北口バスターミナル[8番乗り場から美和大谷線「東大谷」行き、「井庄」で下車(徒歩15分)]

ふじのくに地球環境史ミュージアム NEWS LETTER

発行:ふじのくに地球環境史ミュージアム 企画総務課

住所:〒422-8017 静岡県静岡市駿河区大谷5762(旧静岡南高校跡地)

※現在工事中のため、見学不可とさせていただきます。御了承ください。

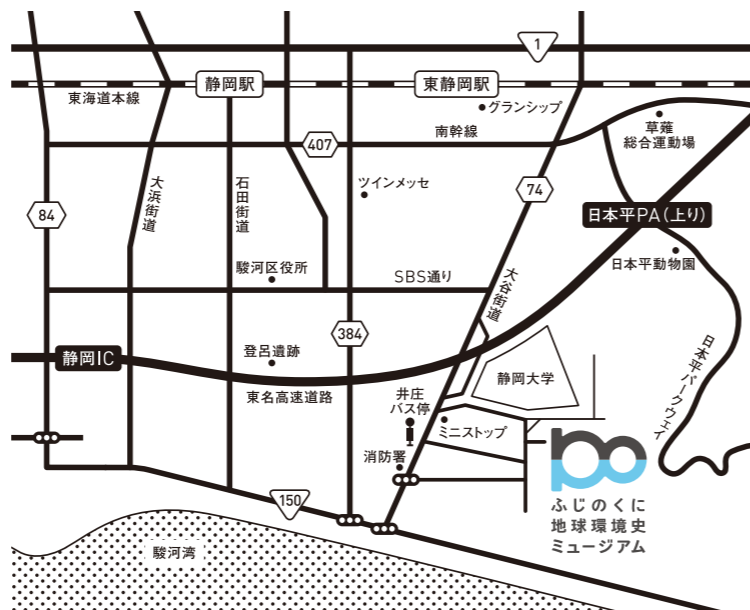
[TEL] 054-260-7111 [FAX] 054-238-5870

[E-mail] info@fujimu100.jp

[ホームページ] www.fujimu100.jp

🐦 https://twitter.com/fujinokuni_NEM

📘 https://www.facebook.com/fujinokuninaturemuseum



百年後の静岡が豊かであるために

NEWS LETTER



ふじのくに地球環境史ミュージアム ニュースレター

- 新年のご挨拶 □ 常設展紹介 □ サポーター募集 □ ミュージアムダイアリー □ 研究員リレーインタビュー

[vol.002]

百年後の静岡が豊かであるために

2016/3/26 SAT
OPEN

この春、静岡に県立博物館が誕生します。

駿河湾を望む丘の上。旧県立静岡南高校が新たな学び舎に生まれ変わりました。「地球環境史」をテーマに、人と自然の関係の歴史をひもとき、未来のあり方を考えます。

30年の時を経て

新年あけましておめでとうございます。

昨年末、県議会の議決を経て、ふじのくに地球環境史ミュージアムの設置・管理及び使用料に関する条例が公布され、開館日が2016年3月26日に決定しました。静岡県の総合計画に県立博物館構想の推進が位置づけられた1986年から、実に30年の時を経ての開館となります。

46億年の地球史の中で、30年はほんの一瞬に過ぎません。しかし、この30年間で、世界は大きく変わりました。例えば、地球の人口は1986年には50億人弱でしたが、2016年には73億人に達しようとしています。情報通信技術の革新や交通網の発達等により、世界の距離感等は確実に狭まり、経済活動のグローバル化が加速していく一方で、これらの経済活動に起因する環境問題はいまや地球規模の問題となり、国家間のレベルで議論されています。

日本においては、阪神・淡路大震災(1995)、東日本大震災(2011)も、この30年間に起こった惨禍です。

自然系博物館に求められる役割も、時代とともに変わりました。ミュージアムは、県立博物館として地域の貴重な自然史資料を記録し、県民の皆様に普及・還元していく従来の機能だけでなく、過去の資料を用いて地球環境を巡る現代の諸問題を伝え、人類がこの星で生存していくための未来への提言を、展示をはじめとした様々な活動を通じて行っています。

本号では、地球環境史をテーマとした常設展示の一部をご紹介します。